

東亜民俗学展開への期待

國分直一※

『比較民俗研究』が創刊されたのを知った時、さすがにと思った。そして、号を追うていよいよ眼を見はらせるような、東亜的立場からする比較民俗学的論考の収載されていくのを見て、その度毎に感動を新たにさせられている。

既にこの世を去ってしまわれた、比較民俗学的立場に立って発言してきた先学たちに、今日の状況を見てもらいたかったと、しみじみと思うことである。

筆者にとって感慨をさそわれるのは、さきの大戦の時代に、台湾にあって、漢系社会の民俗の落穂を拾うような努力していた頃のことである。金関丈夫先生の主催した『民俗台湾』の運動とのかかわりにおいてのことである。この運動は当時の切迫した空気の中で、いわゆる皇民化運動が推し進められていた中であってなされた運動であった。

うぬぼれの強い植民地日本人に反省を、そして漢系の人々には自信をもってもらわねばとする金関丈夫先生のヒューマンな配慮がこめられていたことは言う迄もない。

空しく戦火の中で右往左往するばかりでなく、せめて閑却されがちであった漢系社会の豊かな民俗資料を集積して、将来の東亜的民俗学研究に資せしめたいとするねらいもまたこめられていたことは、筆者などはたえず金関先生の研究室に出入していたのでよく知っていた。

『民俗台湾』が大陸、特に華南の民俗社会に関心を寄せていたことは、同誌に収載されている随筆や論考によってもわかる。金関丈夫先生自身、華南の調査中に撮影した風物写真をのせたり、紀行文をのせたりしている。「海南島三亜港の蛋民」（二卷十一号所収）のグラフは詩情に富んだ写真の集成であった。海南島については森於菟教授も三卷十号から四卷九号にわたって連続して「海南島見聞記」を寄せている。直江広治教授は、北京から「北京民俗通信」（三卷十号所収）を寄せており、天野元之助博士は「瓊崖襍記」（四卷八・十号）を寄せている。

今日にして思えば、『民俗台湾』は東亜各地の民俗研究をエスノロジーにまで上げていく上の據り所となる可能性を秘めていたように思われるのである。そしてそのことに柳田國男先生は期待を寄せていたのであった。昭和十八年十二月の『民俗台湾』第三卷十二号には、その目次に「柳田國男氏を囲みて一大東亜民俗学の建設と「民俗台湾」の使命」と記載されている。

金関丈夫先生が、当時の台大教授だった岡田謙、中村哲両教授を帯同して、東京の柳田邸を訪ね、『民俗台湾』の運動をめぐって、色々教示を仰いだ時の座談の記事がこの号には、かけがえられている。

※ 梅光女学院大学名誉教授

金関先生の「日本の民俗学或は東亜の民俗学のために、台湾からはこういう研究を期待している、或は現在具体的にこれこれのことを調べてもらいたいというような、そういう御指導と御希望を伺いまして、我々の参考としたいと思うのでございます」という要望に対しての柳田國男先生の長い談話がのせられている。筆者はこれまでに紹介したことがあるが、非常に興味深い発言に満ちていて、しかも参考になる指針がふくまれているので再引しておく。

——『朝鮮民俗』という雑誌があったし、蒙疆にも恐らく遠からず出来るでありましょうし、満州にも出来かかってをりますし、北京にもに日本字で書いたものが出るだろうと思っておりますが、その間の交通を妨げてゐるものは言葉であります。これをどうかして乗り切らないと、ごく貧弱なヨーロッパでやってゐるやうな合同さえ出来ない。彼方は或る程度行ってゐるのに、此方はどうしても結合しなければならない。大東亜の民俗学会がお互にこんな情態であつてはいけなから、もっとよく結合して行かなくてはいけないと思ふのです。それには台湾が一番いい条件を備へてゐる。第一にこれに携つてゐる諸君が皆非常に脂が乗つてゐる。いま一つは台湾といふ所が、日本のことわかつてゐる本島人の住んでゐる所だし、その上に、山の上に上がれば色々な種族が別々にあるから、これは大東亜民俗学とでもいふやうなものを目標にして進むには非常にいい稽古台である——

柳田先生は更に民俗学とエスノロジーの関係について、次のように述べている。

——エスノロジーといふものが本当に成長するのに比較民俗学といふか、各民俗学の共通点を濃くして行くところから始めて、自分の赤ん坊の時分から知つてゐるものをスタンダードにして行かなければならぬと思ひます。今のままで進んで行つたのでは心細いと思ひます。むろん大きな学問で、内外を一人で兼ねるといふことは不可能だから、手分するのがいいと思ひます。そうして國內のことはここまで分かつてゐるといふことを示して行くやうにしなければならぬと思ひます。その上で、ゆくゆくはもっと大きな学問になって、エスノロジーの基礎になるんでしょ

柳田先生の大東亜民俗学とは、東亜をふくむエスノロジーを意味していたのである。

『民俗台湾』を通しての運動は、金関先生のひそかなるねらいと、柳田先生の要望があつたのかかわらず、達成することができなかった。しかしその夢は戦後、安定期にはいるや、若い学徒たちによって徐々に実現されようとする気運を迎えている。『比較民俗研究』をめぐる運動は、まさにその動きを語つてゐる。柳田先生が心配された言葉の問題は、今日の若い学徒たちの中には、あるいは朝鮮語をマスターし、或は中國語をマスターして、あたかも自らの民族の民族社会に立ち入るやうに、東亜の諸地域に立ち入ることのできる人々が出現している。東亜民族学展開への期待がいよいよもてる時期に入つてきたことを喜ばずにはおられないのである。

筆者自身はせめて、自らできる範囲のことを行って、空白を埋めていきたいと考えて『えとのす』なる雑誌によって、我々の地域的文化を把握しながら、周辺諸民族文化とのかかわりをもとらえておこうと努力したことがあつた。わが民俗の世界が、北は亜寒帯の地区から、南は亜熱帯の島嶼地区へと広がりを示していることから、周辺の諸民俗文化との交流あるいは折衝の状況を

とらえることは、戦後において調査圏を拡げていた研究者たちの協力を仰いだのであるが、必しも容易ではなかった。しかし最も大きな困難は、出版を引き受けてくれていた会社の負債が増大したことである。かくて筆者の試みは10年にして挫折してしまったのである。

『比較民俗研究』は、筆者の『えすのす』に比するなら、はるかに柳田先生のいわゆる東亜民俗学の構想に近いものとなっている。また日・中・韓の民俗学の研究者を緊密に組みあわせる努力が行われている。

かつて三品彰英先生が、F. ボアズや A. L. クローヴァの方法論によって、日・鮮の民族文化の関係の研究を進めた時代があったが、今やより東亜の先進文明世界である中国の民俗社会とのかかわりを取り上げ、究明していこうとする時代にはいったことが考えられる。

中国においても呉・越世界に関心が注がれることになるのは、かなり遅れて、呉越地史研究会が組織されたのは、ようやく1986年8月末のことであった。その後江南地区の考古学的調査の展開は著しく、次第に華南地区にも深く及ぼうとしている。民俗学的研究もまた進められ、1990年8月には、第1回の『国際百越文化学術討論会』が浙江省社会科学院国際文化研究センターによって開催されるまでになった。『比較民俗研究』においてもこの地域への強い関心が示されているし、最近には『日中文化研究』のようなすばらしい研究誌が登場、「江南の文化と日本」が特集されている。比較民俗学の研究がいよいよ関心の地域を拡げて、豊かな民俗社会へと探究を進めることになったことを喜ばずにはおられないのである。しかし前にもうように、我が民族の占據する列島地区は、北はアムールランドに接近し、南は台湾本島との至近の距離及び、台湾を介して大陸の華南にも、フィリピン群島をはじめとする南海諸島の世界との交流ももちうるのである。われわれは視野を広くもたなくてはならなくなる。その意味において、『比較民俗研究』第4号において、「ソロモン群島のマライタ島ランガ・ランガ・ラグーンにおける貝貨製作」のようなオセアニア地区の物質文化の問題がとり上げられていることを喜ぶものである。

諸民族文化の接觸・展開における時間的展開をとらえていくには、比較民俗学の方法によって可能であると W. シュミット先生は考えたように思われるが、それは必しも容易な作業ではなかろうと考える。民族文化の展開を時間軸においてとらえていく上では、考古学的方法の導入が考えられよう。

考古学的方法によって復原された過去の文化のもつ意味を考えていく上で、エスノロジー的研究の成果から先を導く方法が考慮されているのであるからには、比較民俗学の研究に考古学的方法による成果をとりこんでいくことは十分に意義をもつものと考えてよいであろう。そのような配慮も含めておいていただきたいと期待することは、あまりにも望蜀の期待に過ぎるといわねばならないであろうか。

日本は信頼するに足る古文献をもつことにめぐまれた國であるが、中国は我々の國がまだ先史の深い濃霧の中にある遠い時代に、既に有文字の國であった。

W. エーバハルト博士の百越世界の民俗文化の究明の成果は、フィールド・ワークによるよりも、地方誌をはじめとする可能な限りの文献による把握によって生れたものと考えられるよう

あるが、考古学的研究の導入がない。それは百越世界の考古学研究がまだ進んでいなかった時期に展開された研究であったから致し方なかったと思われるが、今日では考古学的研究も次第に展開を見せている。もし民俗の伝承の Time-depth が文献によるばかりでなく、考古学的方法によっても、把握ができるとしたら、我々にとってどのように大きな意義をもつことになるであろうか。このようなことまで、とりとめもなく思いながら、『比較民俗研究』の今後の展開と充実を切に祈るものである。

國分 直一著 『北の道 南の道—日本文化と海上の道—』

『海上の道』(1961刊)はすなわち稲の道であり、稲作を日本文化の基層におく柳田民俗学の民族文化形成論でもあった。このような一元的な論に対し照葉樹林文化論、ナラ林帯の豊饒性に立脚した北方文化論、アイヌ民族文化論など縄文文化伝統に注目する論が行われ、また日本史学の方面でも海民という視点から日本文化の再考が行われている。多元的な日本民族文化解明の取組が学際的に澎湃として起きている。

このような今日、早くから民族考古学的手法をもって日本民族文化形成に対し多くの発言をされてきた國分先生の考えが端的に伺える『日本文化の古層』(書評参照)と本書が同時に出版された。

内容は I なにが人びとを海に誘ったか(季節風と海流、回遊魚と海獣、貝の道、黒曜石とヒスイの魅力) II 北方の海の道(フゴッペ洞窟に岩刻画を残した人びと、上代日本海に登場した肅慎人、オホーツク文化人の道北・道東沿岸地方の占拠、東北の海) III 朝鮮対馬海峡の道(穀作の受容、稲作の日本への伝播ルート、岩刻画にみる文化の流れ) IV 古代豊国と海上の道(芋草の栄えた国、豊国と海上の道) V 黒潮の道(倭と倭種の国と呉越世界、栽培植物と黒潮の道、二倍染色体をもつイモと稲) VI 海島の不安(刻画のモチーフ、刻画の動機)の六章と九つの覚書

き(1 黄土の子供達の世界 2 方士徐福の挫折と栄光 3 縄文人の思想と言語、4 綾羅木郷台地出土のコケシ型土製品管見 5 旧都山口と防長の海 6 沖縄学への視点 7 八重山の先史文化層 8 ズズダマと紅豆とトウアズキ 9 ネグリトの分布をめぐる)からなる。

いずれの論考も著者の深い学殖とともに、対象に対する暖かい思いが行間に滲みでている。このような学風は『民俗台湾』や台北帝大金関丈夫研究室の雰囲気なのだろうか。『鹿野忠雄』(平凡社 1992)の中に氏の名を見て、二つのミンゾク学にとっての台湾学派?の意味を改めて考えさせられた。

それに似ていたのか旧東京教育大学の史学方法論教室は民俗学と考古学からなっていた。私も根室のトーサンポロ遺跡や山口県の中の浜遺跡の発掘には門前の小僧として参加した。そのような折りの國分先生の何事にでも感動を持って接する“おもしろいですねえ”という言葉の思い出しつつ、臨場感を持って本書を読み進むことができた。ともかく台湾原住民の民族文化探求や台湾の考古学から始発し、北海道オホーツク文化まで達した足跡が多くの示唆を与える論として提示されている。

(佐野賢治)

B 6 版 277頁 第一書房刊

1992年一月刊 3300円